



L・NETワークス通信

NO.612

不幸の手紙からの脱却の方法 — ネットワーク型活動への転換を —

西村美東士（徳島学遊動運動アドバイザー）
徳島大学学開放実践センター助教授

「いきいきいきいき徳島学遊動運動」は、まち全体を学び舎として、市民のだれもが学ぶことができ、教えることのできる「共有システム」である。そして、その主体はつねに市民であり、市民自らの発想と実践によって運営されるのが基本とされる。学遊動推進本部や企画、広報等を担当する各専門部会を、公募による市民ボランティアが活動の中心となる。

「いきいきいきいき徳島学遊動運動」は、まち全体を学び舎として、市民のだれもが学ぶことができ、教えることのできる「共有システム」である。そして、その主体はつねに市民であり、市民自らの発想と実践によって運営されるのが基本とされる。学遊動推進本部や企画、広報等を担当する各専門部会を、公募による市民ボランティアが活動の中心となる。

「いきいきいきいき徳島学遊動運動」は、まち全体を学び舎として、市民のだれもが学ぶことができ、教えることのできる「共有システム」である。そして、その主体はつねに市民であり、市民自らの発想と実践によって運営されるのが基本とされる。学遊動推進本部や企画、広報等を担当する各専門部会を、公募による市民ボランティアが活動の中心となる。

「いきいきいきいき徳島学遊動運動」は、まち全体を学び舎として、市民のだれもが学ぶことができ、教えることのできる「共有システム」である。そして、その主体はつねに市民であり、市民自らの発想と実践によって運営されるのが基本とされる。学遊動推進本部や企画、広報等を担当する各専門部会を、公募による市民ボランティアが活動の中心となる。

不幸になるというもので、チェーンレターの一環である。市民の自己決定活動の一環であるはずの生涯学習なのだ、とくにそうという活動のなかで役員などをやっている人は「なんで自分ばかりこんな苦勞をしなければならぬのだらう」という非生産的な気持ちにさいなまれることがあるのだ。これをそのままほかの人に訴えて協力を得ようとしても、相手だっていやな苦勞はしたくないわけで、進んで協力しようという気持ちになれないため、「不幸の手紙」をもらったときのようないやな気持ちになるだけの非生産的な結果しか残らない。

「いきいきいきいき徳島学遊動運動」は、まち全体を学び舎として、市民のだれもが学ぶことができ、教えることのできる「共有システム」である。そして、その主体はつねに市民であり、市民自らの発想と実践によって運営されるのが基本とされる。学遊動推進本部や企画、広報等を担当する各専門部会を、公募による市民ボランティアが活動の中心となる。

理解してくれていない、会議でなかなか全体の意見がまとまらない、などである。高齢のため体がついていない、という人もいた。市民教養登録者からは、他県の例と同じく、講師としてお呼びがかからないという問題が大きかった。

一方、環境問題に関する活動をやっている人からは「活動を、自分の生きてきた証しと感じている」、民謡の人からは「徳島の宝を伝えるお世話をしたい」などの意見もあった。このような「使命感」としての生涯学習」という側面も忘れてはならない。しかし、それにしては生涯学習活動が本質的に市民の自己決定活動であり続けるためには、「不幸の手紙状況」からはなんとしても脱却し、「使命感」にしても「潔い使命感」が求められているといえる。

そのときばかりは次のようにコメントした。

1 教授法の実践の様子がわかる「市民教養リスト」

市民教養のさらなる活用といたっても、あまり関心がわかない人に講師を依頼するということがあるとしたら、それ自身が生涯学習活動としては好ましくない。たまた無機質なリストではなく、もっとその人の顔がわかり、メッセージや雰囲気伝わり、どんな教え方をしてくれるのか、プログラムまでわかるリストが必要である。また、今後ますます重要になる学校教育への協力については、専門の分野について

だけでなく、教育についての見識を持ち、学校側にもそれが伝わるリストにすべきである。

2 活躍場所の自己開発

町内会、婦人会など地域はだれもが主人公になれる場である。また、市民教養同士でチームを組み、市街にいくつかの会場を提供してもらって、自分たちでキャラバン隊のように各地域に教えてまわるといことも考えられる。

3 自己決定活動はグループ活動

ボランティアな活動は、実際にはそのほとんどがグループ活動として行われるものではないか。そういう意味では、まずは市民教養や役員同士が日常的に教えあったり学びあったりすることが楽しいと思う。

4 自分のための活動

いったん役員を引き受けたのなら責任を持って会合にも出席すべき、という感覚はそれが自分自身に向かっている限りは敬意に値すると思う。しかし、責任感以上に、そこに行けば歓迎される、たから仲間と会いたい、役員自身が学べる、おしゃべりできる、だから会合は楽しい、といういわば「自分のため」という感覚こそが大切なのではない。欠席した人にもっと責任をもっと出席してではなく、「この前は来れなくて残念だったね」と言えるような活動を目指したい。役員の会合であっても、生涯学習活動が自己決

定活動の一環である限りはそういう活動にすることが大切である。

5 ネットワーク型の運営

大人はそれぞれの事情をもって生きているのだから、会合にたまたま参加できた人でもそのときの合意を作り出せばよいし、該当する役員にはなっていないくてもメンバーはたれでも会合に参加でき、意見も述べられるといふことにしたらどうが。来るものを拒まず、去るものを追わず、という自由で柔軟なネットワーク型の運営のための工夫が望まれる。

徳島生涯学習活動のような行政が支援する、あるいは行政が仕掛ける市民参画

師、市民主体の生涯学習事業には、市民の独立型の生涯学習活動とは異なる独自の困難が見え隠れしている。「不幸の手紙状況」に陥る危険性が大きいのである。しかし、その状況からの脱却に向けた市民と行政の努力は、問題が精神構造にまで及ぶというその困難さゆえに、もし成功すれば、きつと市民参画や官民パートナーシップの実体をより確かなものにするようになるだろう。

「ACQUOS」
〒770-0046 西沢 英典 氏 @徳島大
学 学芸部 放課後セクター
http://te5.sakayama.ac.jp/home/mu
chany